

## 一般整形外科から紹介された先天性股関節脱臼例

青森県立はまなす医療療育センター整形外科

盛島利文・青木 恵

**要旨** 1997～2006年に先天股脱関連疾患で、一般整形外科から当科へ紹介された162例を対象として、診断、経過、治療、転帰を診療録、直接診察により調べ、その他一次検診以外での当科受診例や当地域先天股脱検診報告データも合わせ、先天股脱に関わる一般整形外科医診療の傾向と問題点を検討した。対象群の紹介理由は、二次検診後の治療依頼がほとんどであり、対象162例中の当科診断は脱臼・亜脱臼36例で、当科治療はRBのみ34例、他の治療法追加2例、指導観察のみ118例であった。一般整形外科医は先天股脱診療の機会は少なく、専門機関紹介傾向は続くと思われるが、当科紹介例に治療不要例も多く、治療に至る前の予防、正しいリーメンビューゲル法など、先天股診療の関わりを望みたい。

### はじめに

先天股脱診療は、地域差はあるものの、検診・予防・Riemenbügel(以下、RBとする)導入と、難治の場合は専門医による手術等、検診から治療までの体制が確立している<sup>2)4)6)7)</sup>。しかし、近年の少子化や医療の専門細分化により、一般整形外科医の小児整形疾患に接する機会は減少しており、この先天股脱診療体制が万全であるか懸念が持たれている。

そこで今回、人口約30万の地方都市である当地域における先天股脱診療の現状を、一般整形外科医から小児整形を専門とする当科へ紹介された例を調査し、考察した。

### 対象と方法

1997～2006年に先天股脱関連疾患として一般整形外科医から当科へ紹介された162例(二次検診後の診断治療依頼133例、「治療困難」のため20例、治療後の観察9例)を対象群とし、診断、経

過、治療を診療録等により調べ、5年ずつ前後期に分け比較した。また、一次検診により指摘を受けた後、二次検診として当科を受診した218例を比較群とし、さらに当地域先天股脱検診年報<sup>6)</sup>と合わせ、一般整形外科医からの当科紹介例の変化と傾向を検討した。

### 結果

対象162例を平成9～13年、14～18年の前後期で分けると、ともに81例であった。また、前後期の男女の占める割合は同様であった。前後期とも紹介理由は、「二次検診後の治療依頼」が多かったが、後期で「(治療を試みたが)問題があったため」が増加していた。当科診断は脱臼亜脱臼が前期22例、後期14例、臼蓋形成不全前期17例、後期27例であった。すなわち後期は脱臼亜脱臼が減少、臼蓋形成不全が増加、正常例はほぼ横ばいであった(図1)。対象例中当科で治療を行ったのは全44例であり、RBのみ前期16例、後期18例、牽引・徒手整復などの治療は前期8例、後期2例

**Key words** : developmental dysplasia of the hip(先天股脱), Riemenbügel(リーメンビューゲル法)

連絡先 : 〒031-0083 青森県八戸市大久保字大塚17-729 はまなす医療療育センター 盛島利文 電話(0178)31-5005  
受付日 : 平成20年1月4日

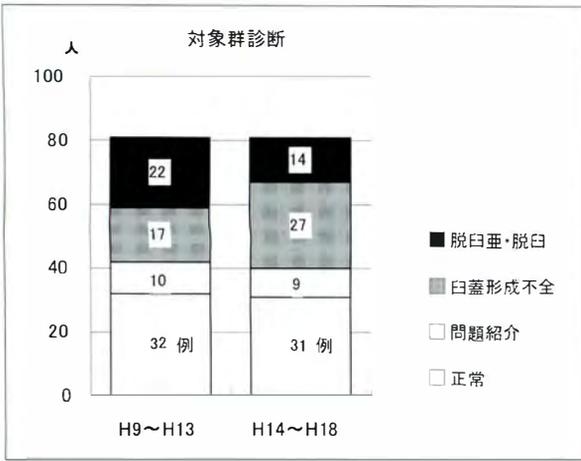


図 1. 対象群の前後期別診断割合

前期 H9~13, 81 名(男児 12 名, 女児 69 名),  
後期 H14~18, 81 名(男児 14 名, 女児 67 名)

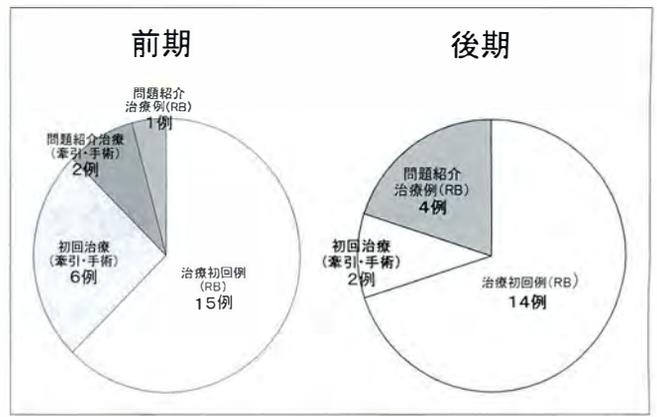


図 2. 対象群治療例の前後期別治療内容

後期で紹介治療例中 RB 難治例(牽引・手術)が減少していた。  
後期の問題紹介例のうち牽引手術例はなく、他医で RB 難治とされても当科 RB で整復されていた。

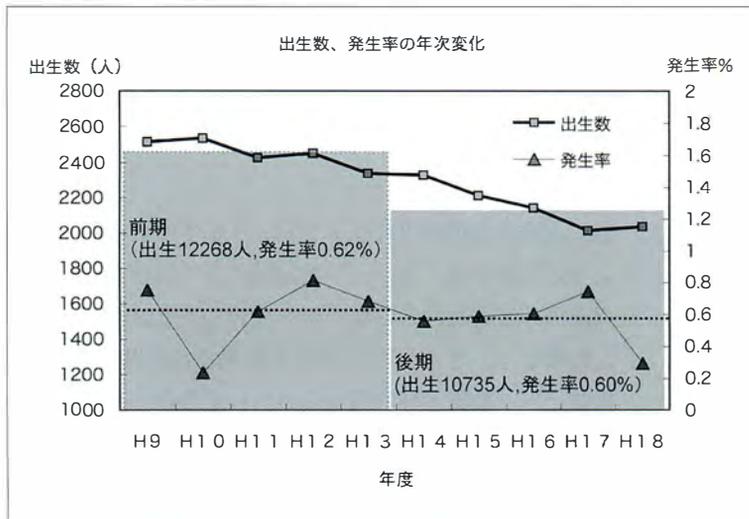


図 3.

八戸市先天股脱一次検診のまとめ

出生数は年々減少傾向であり、前後期比較で有意に減少しているが、先天性股関節脱臼の発生率は前後期でほぼ同様であった。

で、後期 RB 整復率が高かった(図 2)。治療を要した割合は、対象群 162 例中 44 例であり、紹介によらず二次検診として受診した比較群 218 例中 27 例より  $\chi^2$  乗検定で有意に多かった。地域検診の年次報告<sup>6)</sup>より、地域の出生数減少に伴い一次検診児実数の前後期比較では t 検定で有意に減少し、先天股脱診断例の実数は減少傾向であった。しかし、先天股脱発生率平均の前後期比較は t 検定で有意な差はなく約 0.6%であった(図 3)。

例が減った。

③ 当科紹介例は、二次検診として当科受診例よりも要治療となる割合が高かった。

④ 少子化傾向で先天股脱の実数は減っているが、発生率は不変であった。実数減少であっても当科紹介例は減少しておらず、相対的に当科紹介率は増加し、治療不要例、RB で整復容易例も紹介されていた。

### 症例検討

一般整形外科から当科紹介例を検討したところ、診断、専門医紹介の要否、RB 治療法に問題がある症例があった。

症例 1：他医で二次検診を受け脱臼といわれて

### 結果のまとめ

- ① 対象群とした当科紹介例の前後期比較では、臼蓋形成不全診断の割合が増えた。
- ② 当科紹介例治療の前後期比較では、RB 難治



図 4. 症例 1：脱臼として紹介された正常例

4 か月，男児。開排制限あり，脱臼として紹介された。右大腿骨の外側化と骨頭核未形成にて脱臼疑われたと思われるが，骨盤の傾きによる左右差と考えられ，臼蓋形成も良好であり，超音波所見でも正常と診断された。



図 5.

症例 2：見逃された脱臼例

一次検診で見逃され，6 か月時小児科より総合病院整形外科へ紹介されたが，そのまま当科紹介受診。7 か月時 RB にて整復された。

紹介された正常例。4 か月，男児。右股開排制限で脱臼疑いとして当科紹介された。しかし，Xp 診断に加え当科で行った超音波診断でも正常所見であった(図 4)。臨床症状と X 線所見の対比，診断に問題があったと思われる。

**症例 2：**一般整形外科医の 3 か月検診で指摘を受けず，6 か月小児科健診時に股関節脱臼を疑われ，総合病院整形外科を紹介され脱臼診断後，当科紹介された。生後 6 か月を過ぎていたが初回 RB を開始し 7 か月時整復された。1 歳 4 か月より歩行している(図 5)。おそらく 3 か月検診時に開排制限なく，X 線所見で骨頭核出現していたため見逃されたと思われるが，臼蓋形成や大腿骨の外側化を見逃し，X 線読影力に問題があったと考えられた。

**症例 3：**3 か月より右股臼蓋形成不全として一般整形外科で経過観察していた。4 か月時の X 線所見で改善傾向と見られたが 5 か月時やや増悪がみられ，遠方のため直接受診の前に画像と文書

で当科へ相談された。外転内旋位，開排位の X 線撮影を勧め，当科で脱臼と診断した。7 か月時当科紹介されクリックサインを認め RB 使用した。8 か月頃整復位安定し，1 歳 5 か月より歩行している(図 6)。経過中問題は生じていないが，早期の治療開始が望ましい<sup>4)</sup>と思われ，一般整形外科医で診断，治療が困難な場合は専門医に紹介すべきであった。

**症例 4：**一般整形外科医にて右先天股脱の診断を受け，3 か月時より RB 使用し，5 か月時整復困難として当科紹介された。RB は前後のベルト，胴ベルト調節穴が不足しており，また，下腿上輪ベルト高が調整できない，不良な RB であった<sup>3)5)</sup>。バンド自体を修理して RB の基本的な肢位となるよう着用したところ 6 か月時整復，当科で再 RB 着用から 12 週間で外し，1 歳 2 か月より歩行している(図 7)。RB チェック項目(図 8)から，この症例の紹介時の RB 状態は，下腿ベルト位置が下方にあり，前内側のバンドが膝から外れやすい不良



図 6. 症例 3 : 7 か月時に疑いで紹介された脱臼例

3 か月時開排制限で他医にて観察されていた。経過中 5 か月時 Xp で大腿部の外側化が見られ、6 か月時、股関節外転内旋位 Xp で求心位を得られないことから相談を受け、7 か月時当科紹介受診。RB 治療で整復位の安定を得られた。



図 7. 症例 4 : 難治として紹介されたが当科 RB で整復された例

他医で RB 整復困難として 4 か月時当科紹介されたが、不良 RB を修正したところ整復された。右臼蓋形成不全が遺残している。

肢位のため、整復困難であったと考えられた。RB 装着の基本である肩ベルト位置、胴ベルト位置、下腿上輪ベルト高さ、前内側、後外側ベルトの張り具合、股関節の肢位等調整<sup>3)5)</sup>で一般整形外科においても整復率は上がると思われた。

### 考 察

整形外科の専門の細分化、少子化に伴う先天股脱発生数減少に際し、地理的、人的に専門機関の充足があれば、先天股脱検診から治療すべてを単

一施設で担うことも可能である。しかし、当地域も含めた地方にとっては交通の便や医師の過疎化も考えると非現実的である。また、今回 RB 整復例、治療不要例の紹介割合が増加していることから、一般整形外科医が先天股脱診療から離れつつあると考えられる。一般整形外科医が少数ながらも地域で必発する疾患の指導、保存療法<sup>1)2)7)</sup>を敬遠するのは問題と思われ、今後、一般整形外科医の先天股脱診療への積極的な関わりを求め、一次検診、二次検診での正しい診断、脱臼進行予防の

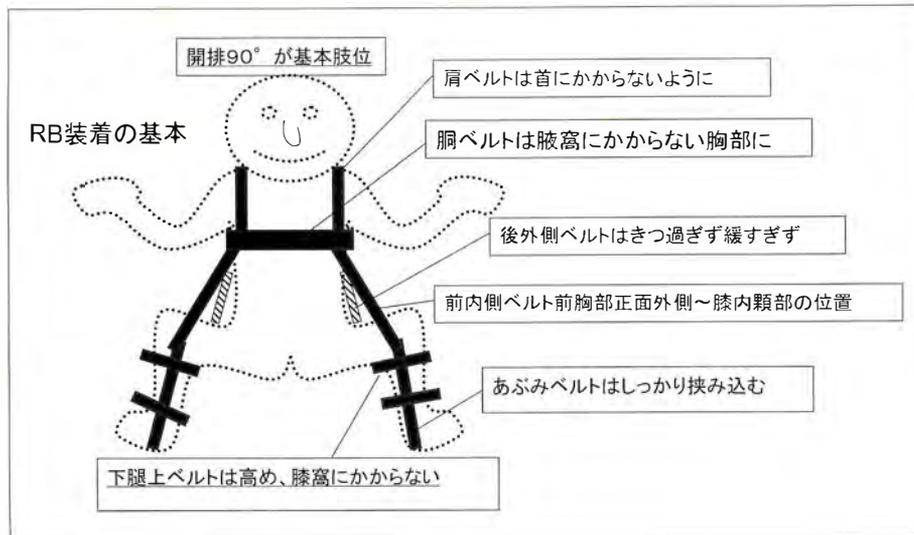


図 8. リーメンビューゲルのチェック項目

必要に応じ、腋下屈曲を調整するが、基本的な当科のRBチェック項目である。

ための家族指導，一般整形外科医の専門医の情報フィードバック等で一般整形外科医の先天股脱診療技術の向上維持を進めたいと考えている。

#### まとめ

一般整形外科医から当科に紹介された先天股脱例は難治例が減少し，正しいRB装着で十分対応可能な症例も多かった。専門医への紹介時期，治療法選択に不適切な症例も散見され，一般整形外科医に，本症が整形外科基本的疾患と認識され，専門医と連携協力し診療にかかわるよう働きかけたい。

#### 文 献

- 1) 岩崎勝郎：先天股脱に対する Riemenbügel 法

の応用とその適応. 整・災外 29 : 617-624, 1986.

- 2) 小林大介, 薩摩真一：当院におけるリーメンビューゲル法の治療成績. 日小整会誌 15 (2) : 181-184, 2006.
- 3) 坂口 亮：乳幼児先天性股関節脱臼治療の実際. 金原出版, 東京, 1-12, 1976.
- 4) 坂巻豊教：先天性股関節脱臼. NEW MOOK 整形外科(越智隆弘ほか編)No. 15, 金原出版, 東京, 85-92, 2004.
- 5) 鈴木良平：先天性股関節脱臼とその機能的療法. 南江堂, 東京, 78-100, 1973.
- 6) 盛島利文：先天性股関節脱臼検診レポート. センター年報(八戸市総合健診センター 八戸市医師会) 22 : 107-111, 2007.
- 7) 守矢秀幸ほか：予防処置導入後の乳児先天股脱. 臨整外 25(3) : 293-297, 1990.

#### Abstract

### Diagnosis and Treatment for Developmental Dysplasia of the Hip

Toshibumi Morishima, M. D., et al.

Department of Orthopedic Surgery, Hamanasu Rehabilitation Center for Children with Disabilities

We report the diagnosis and treatment for developmental dysplasia of the hip (DDH) in 162 cases, seen between 1997 and 2006.

All cases were referred to us for secondary examination of DDH from the general orthopedic department. We confirmed DDH in 36 cases. Of these, 34 were treated using the Riemenbügel method, while the other 118 were kept under observation only. Pediatric DDH is not often seen in the general orthopedic department, and referred to pediatric orthopedics should be recommended for further examinations (for instance correct Riemenbügel method) in all suspected cases.